育児雑誌にみる子どもの事故防止

山本善積・宮崎裕子*

Articles about Safety-first in a Magazine on Child Care

Yoshizumi YAMAMOTO・Yuko MIYAZAKI

(Received September 26, 2008)

1．研究の意義と目的

(1)子どもの不慮の事故

わが国では不慮の事故による子どもの死亡が多く、2005（平成17）年の人口動態統計でも、0歳の死因の第3位、1～4歳及び5～9歳の死因の第1位が不慮の事故である（0歳の死因順位は年によって異なるが、最近5年間は5位以内に入っている）。この不慮の事故とは、「人口動態統計」やその基になっているWHO勧告の国際分類では、「交通事故」と「不慮の損傷のその他の外因」に大別され、「不慮の損傷のその他の外因」には転倒・転落、不慮の溺死及び溺水、不慮の窒息、熱及び高温物質との接触などが含まれる。これらの不慮の事故には住まいや地域の環境、あるいは住生活の仕方が関係していることから、これまでもその状況や対策について論じてきた[1)]。

確かに現在も不慮の事故による子どもの死亡は多いが、減ってきていることも事実である。表1の不慮の事故による死亡数の推移をみると、0歳でも、1～4歳でも、5～9歳でも死亡数は減ってきていることが確認できる。とくに1995年以降、急激に死亡数が少なくなった。死因には年齢階級による違いがあり、0歳では不慮の窒息が死亡の大半を占めていて、1～4歳及び5～9歳では交通事故、不慮の溺死及び溺水、不慮の窒息など多様な要因が見られる。すべての死因での死亡数が一様に減ってきているとは言えないが、1990年以前に多かった死因による死亡数は減少傾向が確認できる。

こうした死亡数の減少から、直ちに不慮の事故そのものが減少しているとは言えない。例えば、東京消防庁の「都民生活における事故（平成18年度中）」（平成19年11月）によれば、救急搬送された0～5歳児の事故原因では転倒が36％と多く、以下、墜落・転落（19％）、誤飲（14％）という順である。死亡数とケガなどによる救急搬送人数が、さらには不慮の事故の発生数が比例していないことが推測できる。したがって、不慮の事故による子どもの死亡数の減少をもって、不慮の事故が少なくなったとは即断できないものの、不慮の事故を防ぐ対策が効果的に行われてきたと推測できる。

1995年頃は子どもの不慮の事故防止に力が注がれるようになった時期である。1996年に東京都池袋保健所に「子ども事故防止センター」が開設された。ここでは、チャイルドシートの展示やモデルルーム（居間、台所、浴室、トイレなど）を使っての事故回避の方法の展示とあわせて、事故情報の収集や発信などもすすめられた。こうした活動は、都内のみならず全国に影

＊奈良県立医科大学附属病院

表１　年齢階級別不慮の事故による死亡数の推移

（単位：人）

年齢階級	年	転倒・転落	溺死・溺水	窒息	交通事故	その他	事故計
0歳	1985	14	35	347	20	35	451
	90	12	27	247	28	32	346
	95	8	22	231	18	50	329
	2000	8	7	160	16	26	217
	05	7	9	133	11	14	174
1～4歳	1985	49	414	84	312	143	1002
	90	45	262	64	265	89	725
	95	33	176	90	176	155	630
	2000	40	77	49	104	38	308
	05	21	56	39	71	49	236
5～9歳	1985	17	242	18	362	89	728
	90	13	150	20	274	66	523
	95	13	112	13	218	171	525
	2000	17	63	14	119	29	242
	05	8	61	15	109	37	230

出所：人口動態統計

響を与え、多くの保健所や自治体での取組を生み出した。また、事故防止の啓蒙という面では、育児雑誌の役割もあげられる。この頃に創刊された育児雑誌『ひよこクラブ』（ベネッセコーポレーション発行）がその後、発行部数を増やしていった。この雑誌は月刊で、０歳から１歳半程度までの乳児期の育児に関わる人たちを主な読者としていて、この年齢に起こりやすい様々な不慮の事故を取り上げてきた。同じ頃に『たまごクラブ』（ベネッセコーポレーション、1993年創刊）、『げんき』（講談社、1994年創刊）、『こっこクラブ』（ベネッセコーポレーション、1996年創刊）などの育児雑誌が登場し、育児に知識や情報が提供されるようになったことがわかる。乳幼児の育児を扱った雑誌の中でも『ひよこクラブ』は最も発行部数が多い[2)]ことから、各家庭での不慮の事故防止に影響を与えてきたと考えられる。

⑵目的と方法

本稿では、育児雑誌『ひよこクラブ』の創刊（1993年11月）から2006年末までに掲載された記事の中で、子どもの不慮の事故やその防止について扱った記事を対象として、どのように取り上げられ、またどのように変化したか、その変遷を捉えようとした。これによって、子どもの不慮の事故防止に関する社会的な認識や啓蒙の進展、これからの課題がわかると考えた。

不慮の事故について扱った記事を、次のような視点で区分した。①家庭内の事故に関するものと家庭外の事故に関するもの、②事故を扱ったものと防止策を扱ったもの、③その防止のためにどのようなものを使い、工夫しているか、手作りや保護者のアイデアによるものと既製の用具（以下ではグッズと呼ぶ。）の使用。

子どもの不慮の事故は家庭内で発生するものが多いものの、子どもの行動範囲の広がりで家庭外での事故も多くなる[3)]。しかも、家庭外での事故の場合は発生に関わる要因が多く、家庭内と同じような方法で防止できるとは限らない。したがって、どのように事故防止をアドバイスするかということも重要である。また、事故を防止するためのグッズを多く見かけるようになったが、既製品がなかった時はどうしていたのか、現在はどのようなものが市販されているのか、という点も事故防止の進展に影響を与えるだろう。

以下では、まず創刊からの不慮の事故に関する記事をリストアップする。次いで、その推移や記事の内容について述べることにする。なお、創刊号に当たる1993年11月号は所在が判明せず、見ることができなかった。

2．『ひよこクラブ』における不慮の事故の記事（1993年12月～2006年12月）

不慮の事故に関する記事を表２に示す。記事の一部で不慮の事故を扱っている場合もリストアップした。例えば、その季節に起こりやすい病気と事故をまとめて扱っている記事がこれに当たる。

この表２で用いた記事の区分は次のとおりである。

①家庭内事故の記事を「Ａ」、家庭外事故の記事を「Ｂ」、家庭内事故の防止に関する記事を「Ｃ」、家庭外事故の防止に関する記事を「Ｄ」とした。これらの区分に当てはまらないその他の記事（池袋保健所に事故予防センターが開設された記事など）を「Ｅ」で示した。

②手作りやアイデアによる事故防止用具（以下、「手作り事故防止グッズ」と記す。）の記事を「１」、市販されている既製品の事故防止用具（以下、「既製の事故防止グッズ」と記す。）の記事を「２」とした。

③事故に対する応急手当の記事は「●」、2000年から連載された「小児救命救急センター24時」の記事は「救)」で、また、該当記事が別冊付録や巻頭・巻末のとじこみ付録になっているものは「◆」で示した。

3．記事の変遷

1993年から2006年までの不慮の事故に関する記事をリストアップした表２を基に、ここからわかることを述べる。

(1)季節による違い

『ひよこクラブ』の読者はおよそ１年から１年半で『こっこクラブ』など別の育児雑誌に移っていくと想定されるので、少なくとも毎年１度は不慮の事故がしっかりと扱われる必要があるが、不慮の事故に関する記事は夏と冬に多く見られる。表３に示した月ごとの記事数でわかるように、７月・８月と11月・12月・１月が不慮の事故に関する記事が多く掲載されてきた月になっている。

７月・８月には、夏に起こりやすい事故に関する特集が組まれていて、「赤ちゃんの事故ストップBOOK」といった別冊付録も多い。例えば、2000年７月の「赤ちゃんの事故ストップBOOK」を見ると、まず、子どもの発達とそれに伴って起こりやすい事故が一覧表にまとめられていた。そして、次のような事故が詳しく取り上げられ、その事故の際の応急処置や事故の予防の仕方、事故防止グッズなどが紹介されていた。取り上げられた事故は、①溺れた、窒息した、②熱中症になった、③落ちた、転んだ、切った、かまれた、④乗り物の事故（クーファン、ベビーカー、自動車、自転車、歩行中)、⑤やけどをした、⑥異物を飲んだ、詰まった、目・

表２ 『ひよこクラブ』の不慮の事故に関する記事（1993～2006年）

月	記事タイトル	分類	記事タイトル	分類
	1993年		1994年	
1月				
2月				
3月			ベビー用品すっきり収納&整理	C1
4月			ベビーの体の基礎知識(頭を打った)	AB
5月			◆育児のウラ技帖(車･自転車)	BD
6月			ベビーカーの使い方	BD
7月				
8月			◆真夏の育児おまかせ百科 私はこれで育児を乗り切った おでかけ SOS	C1 A B●
9月			アイデアマーケット（安全） 初めてのドライブ	C1 D
10月				
11月			我が家の事故対策	AC1
12月	赤ちゃんのやけど	AC2●	住まいの点検&整備セーフティベビー	CD12
	1995年		1996年	
1月				
2月				
3月				
4月			お住まいすみずみ拝見（手作り危険防止グッズ）	C1
5月				
6月			アイデアマーケット（いたずら&危険防止） たばこはいいことないよ	C1 A
7月	真夏の育児乗り切りアイデア 夏のベビー救急手帖 初めての病気とケガパニック	B AB● A	◆夏の事故！救急ケアノート	AB●
8月				
9月	アイデアマーケット（いたずら防止）	C1		
10月	病気とホームケア百科	CD		
11月	リサイクルアイデア ◆事故防止&救急シート	C1 CD●		
12月	◆やけどと誤飲 冬のあったか育児スーパーテク ママのヒヤーリ体験 病気と事故防止	A● C2 AB ABCD12		
	1997年		1998年	
1月	◆冬の事故はココにご注意！（やけど、落ちる、誤飲）	ABCD2●	アイデアマーケット（危険防止グッズ）	C1
2月	はいはい赤ちゃんの大冒険 ぴよぴよニュース（池袋事故予防センター）	AC E		
3月	後追いが激しい（安全対策） ベビーの引き起こす困ったこと 赤ちゃんのための収納	C2 A C1	事故防止アイデア大集合	AC12
4月				
5月				
6月	アイデアマーケット(危険防止グッズ)	C1		
7月			◆お部屋の中の危険防止 夏作りベストテク（事故防止）	C12 CD
8月	◆事故マンガ BOOK	AB●	夏の事故 SOS	ABCD
9月				
10月	お風呂事故防止 危険防止	C2 C12		
11月	◆発育・発達 BOOK（誤飲）	C		
12月	◆冬の病気と事故おまかせ百科	ABCD●	赤ちゃんの誤飲チェックガイド	AC
	1999年		2000年	
1月	甘く見ないで赤ちゃんのやけど	A●	救）タバコの誤飲 お部屋づくり やけど注意報発令！	A C2 A●
2月	だからチャイルドシート	BD	救）やけど ママと赤ちゃんの入院奮闘記	A A
3月	このときこの場所が危ない！	AB●	救）自動車事故①	B
4月	お悩みランキング大解決（いたずら、誤飲） 初めてのケガレポート	AB AB●	救）自動車事故②	BD
5月	赤ちゃんの介護テクニック	A		
6月			救）溺水	AC
7月	真夏の育児疑問に答える(事故、いたずら)	AC2	◆赤ちゃんの事故ストップ BOOK	ABCD●
8月	◆赤ちゃんの事故ストップ BOOK	AC12	ベビーカー使いこなし術	D
9月				
10月	アイデアマーケット(事故防止)	C1	赤ちゃんケガレポート	AB
11月			救）誤飲 ◆誤飲チェックリスト ぐっどニュース(家の安全対策)	AC A● AC2
12月	事故から守るベビーのお部屋	C12	お部屋づくりガイド(事故防止) 救）やけど	AC12 A
	2001年		2002年	
1月	めざせ！やけどゼロの冬 真冬の育児お部屋づくり	A● C2	◆冬に多い赤ちゃんの事故&けがストップ完全ブック 赤ちゃんのやけどはこうして防ぐ	C2 AC●
2月			救）誤飲・灯油	AC
3月		AC	救）転落事故・クーファン	BD
4月				
5月				
6月			◆事故ストップ BOOK	ABCD1●
7月	夏の事故･病気救急マニュアル ◆育児お助けアイデア BOOK（事故防止）	D C1	お部屋づくり	C2
8月	◆病気&ケガやっていいこと悪いこと	ABC●	◆室内の事故防止 夏に多い事故とけが 救）自動車事故	C12 ABCD● B
9月	部屋づくり（事故防止）	C2		
10月				
11月	たばこおどろきの事件簿	AB	救）やけど	AC
12月	事故を防ぐお部屋づくり&収納計画	AC12	必ず防げる赤ちゃんのやけど 育児のお悩み回答（危険）	AC● C2
	2003年		2004年	
1月			◆事故&ケガストップBOOK	ABCD2●
2月	◆やっていいこと悪いこと（事故&けがBOOK）	AB●		
3月				
4月	初めてのけがレポート 救）転倒・転落 ◆生活リズム&生活習慣(危険・いたずら)	AB● B C		
5月	赤ちゃんを襲う外での危険 ベビーの事故防止&救急シート 救）のどを突いた	BD AB● A		
6月	事故とけがファイナルチェック	ABCD●		
7月				
8月	◆室内の事故防止 救）自動車事故	C12 BD	夏の事故&病気から赤ちゃんを守る	BD
9月	安全部屋づくり&収納計画	AC12	外での危険と地震赤ちゃんはこう守る！	BD
10月			救）クーファンからの転落 病気とケガのホームケア 室内の事故とけが必ず防ぐぞ！大作戦 使える！事故防止グッズ85	B A● AC12 C2
11月			◆赤ちゃんの育つ力を伸ばす(事故防止)	AC
12月	真冬の育児お部屋づくり（危険防止）	C2	やけどから赤ちゃんを守る 京都の事故防止センター	AC● E
	2005年		2006年	
1月	救）誤飲	A		
2月			◆事故・けが・病気とっさの対応ハンドブック	AB●
3月	救）やけど ◆ケガとっさの対応シート	A E	救）誤飲	A
4月	はいはい赤ちゃんのお部屋安全計画	AC12	育児グッズ（チャイルドシート） 春から夏に気をつけたい病気 自転車デビューの心得	D2 D BD2
5月	◆生活リズムと生活習慣まる分かりナビ(危険･いたずら防止)	C		
6月			◆事故防止 育児の困った（たっち・あんよ） ◆やっていいこと悪いこと	AC C2 ABCD
7月	救）熱中症 真夏の６大お世話	A CD12	真夏の育児（室内・お出かけ・事故防止） 救）溺水	ABCD2 A
8月	夏の事故&病気 あんよができるようになったら 快適車空間 ぐっどニュース（お出かけ）	BD● ABCD BD BD	事故病気ヒヤリ・ハッと実例27 夏の三大トラブルから赤ちゃんを守る	ABCD CD
9月	事故防止	AC12●	起こりやすい事故を起こさない方法45 セーフティゲート	CD12 C2
10月				
11月	救）誤飲 遊ぶ（危険）	A C2	お世話のやめ時はじめ時 3,6,9ヶ月お世話はこう変わる	ABCD C
12月	やけどから赤ちゃんを守る 真冬の育児（お部屋づくり） 目が離せない赤ちゃんから目を離すとき	AC● AC2 AC	赤ちゃんにやさしい冬家電 真冬の育児やっていいこと悪いこと 救）誤飲（灯油）	C2 A● A

耳・鼻に入った、である。夏に多い事故は勿論のこと、落ちた、転んだ、異物を飲んだといった事故のように日常的に起こる事故も含めた総合的な事故防止の手引書となっていた。

また、夏向きの部屋づくりや室内の事故防止に関する記事も見られた。エアコンに頼りすぎないで、風通しをよくし、日射を防止して快適な環境をつくるアドバイスや扇風機、ござなどの用具が紹介された。それと同時に、窓を開けることによる転落事故の注意、扇風機の事故を防ぐネット等の既製の事故防止グッズも紹介された[4)]。

12月を中心にその前後の11月から1月にかけて、冬の事故が取り上げられてきた。とくにやけどが重点的に扱われ、また、12月は1996年以外の毎年、事故に関する記事が見られた。例えば、巻頭とじ込み付録になっている1995年12月の「やけどと誤飲」の記事では、やけどの事故原因を空間別に紹介し、やけどしたらすぐに水をかけて冷やすなどの応急手当を示していた。あわせて、床から1m以下の場所に、乳児の口に入る直径3.5cm以下のものを置かないなど、誤飲防止のポイントも記されていた。

夏と同様に冬の快適な部屋づくりの紹介や事故防止に関する記事も見られた。エアコンに頼りすぎないで部屋を暖かくするには、すきま風を防ぎ、温度調節や加湿、換気をする必要があるが、すきま風対策の様々な工夫、暖房器具による事故を防止する工夫や既製の事故防止グッズが紹介された[5)]。こうした冬に起こりやすい事故にも触れながら、室内での転落・転倒、ぶつかり、挟まれ、誤飲など行動範囲の拡大とともに広がる日常的な事故とその対策、これらの事故を防ぐ手立ての1つとなるモノの整理・整頓や収納について工夫例を紹介した記事も冬には多かった[6)]。

表3　月ごとの記事数

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
記事数	12	8	12	12	6	10	15	20	9	9	14	23	150

(2)3つの時期による記事の変遷

表4は、表2の記事の分類を年単位でまとめて統計的に示したものである。この表によれば、1993年から2006年までを3つの時期に分けて見ることができそうである。最初の時期は1996年までで、この頃は既製の事故防止グッズを紹介した記事はごく少なく、『ひよこクラブ』の読者が行っている工夫や手作りの事故防止グッズの紹介が多く見られる。2つ目の時期は1997年から2002年までで、それまでの手作りの事故防止グッズよりも既製の事故防止グッズを扱った記事が多くなる。3つ目の時期は2003年以降で、家庭内事故とあわせて家庭外事故を扱った記事が多く見られる。事故防止グッズでは既製のものを扱った記事が2つ目の時期と同様に多い。以下、3つの時期の記事について述べる。

①1993年～1996年

1994年には事故や事故防止の特集記事は少なく、ベビーカーの使い方や自転車、車に乗せる際の注意点などが育児の記事の中で触れられるだけだったが、次第に不慮の事故や「ヒヤリ」とした体験など読者の体験が多く取り上げられ、事故防止のチェック項目が示されたりした。また、事故防止や子どものいたずらを防ぐアイデアグッズ、各家庭での工夫も多く紹介された。

子育ての過程で起こる危険な体験は実に多い。離乳食に作ったうどんを冷ましている途中で子どもがひっくり返して軽いやけどをした、目を離した間にたばこや画鋲を口に入れた、子ど

表４ 『ひよこクラブ』の記事の分類

年	家庭内事故(A)	家庭外事故(B)	家庭内防止策(C)	家庭外防止策(D)	応急手当(●)	手作りグッズ(1)	既製のグッズ(2)	記事数※
1993	1	0	1	0	1	0	1	1
1994	3	4	5	5	1	5	1	11
1995	5	4	6	3	3	3	2	11
1996	2	1	2	0	1	2	0	4
1997	5	3	9	2	3	3	4	12
1998	3	1	6	2	0	3	2	6
1999	7	4	4	1	3	3	3	10
2000	12	4	6	3	3	1	3	16
2001	5	2	6	1	2	2	3	9
2002	6	4	10	3	4	2	4	12
2003	6	7	5	3	4	2	3	12
2004	5	4	5	3	3	1	3	10
2005	10	4	9	5	3	3	5	17
2006	10	6	11	9	2	1	7	19
計	80	48	85	40	33	31	41	150

＊記事数にはその他（分類に当てはまらない記事）の２つを含む。

もが台所の包丁掛けから包丁を抜き取って持っていた、母親が風呂で洗髪している間に子どもが浴槽に落ちて溺れていたなど[7)]、これらの事故体験を通して読者に注意が喚起された。

事故防止に関しては、「ベビーの事故防止＆救急シート」（1995年11月）で住まいでの事故防止のためのチェック項目が階段・玄関、浴室、キッチン・ダイニング、居間・寝室など空間別に示され、外出時の項目もあった。同時に、この時期の事故防止策を特徴づけているのは、家庭での工夫や手作りグッズの紹介である。転倒を防止するために靴下に滑り止めをつけたり、おすわりが出来るようになった乳児の転倒を防ぐクッションを布団や浮き輪など手近な材料で工夫して作ったり、ダンボールやつっぱり棒で台所や階段への通行をガードするフェンスを作ったり、危険なものが入っている引き出しを簡単に開けられないようにする工夫など、子どもの事故を防止するために家庭で行ってみた工夫が数多く紹介された[8)]。こうした家庭のアイデアを読者の投稿によって集め、継続的に紹介したのが「アイデアマーケット」である。この記事は1999年まで掲載された。これ以外にも「お住まいすみずみ拝見」（1996年４月）で読者の安全に配慮した住み方が紹介された。折りたたみができる家具を選んだり、家具を１部屋にまとめて配置することで子どもの安全な遊びスペースを室内に確保した例などとあわせて、ミルク缶で転落防止の柵を手作りした例など事故防止グッズも紹介された。

②1997年～2002年

２つ目の時期には不慮の事故に関する記事が多く掲載されるとともに、巻頭の特集や別冊付

録で事故防止が取り上げられるなど、記事内容も充実してきた。そして、既製品の事故防止グッズが増えてくる状況を反映して、その紹介が多く見られるようになった。

夏と冬には子どもの事故に関する特集を組むというスタイルが確立されたようで、毎年、7月・8月と12月・1月に事故の特集記事が見られた。夏には「事故マンガBOOK」(1997年8月)、「赤ちゃんの事故ストップBOOK」(1999年8月、2000年7月、2002年6月)といった別冊付録が多かった。冬には「冬の事故はココにご注意!」(1997年1月)、「事故から守るベビーのお部屋」(1999年12月)など巻末や巻頭特集が数多く見られた。夏の「事故ストップBOOK]では、自動車内での事故やベビーカーの事故など家庭外の事故も多く取り上げられ、家庭内の事故対策では室内で使える既製の事故防止グッズとそれを補う読者のアイデアが紹介された。冬の「事故から守るベビーのお部屋」(1999年12月)では、リビング、ダイニングキッチン、寝室、浴室・洗面所、玄関、階段・ベランダといった空間別に起こりやすい事故と防止のためのアイデアや手作りの事故防止グッズ、既製の事故防止グッズが同数程度紹介された。また、人工芝を玄関やベランダに敷いたり、洗濯ネットを浴室の小物入れに使うなど市販品を活用した事故防止も紹介された。

「冬に多い赤ちゃんの事故&けがストップ完全ブック」(2002年1月)では、安全な環境づくりだけでは事故を防ぐことができなくて、親が事故の起きる状況を理解して絶えず注意することが大切であると述べていた。そして、家庭内で起こりやすい事故やけがと外出時に起こりやすい事故やけがについて、事故の起きる状況、事故の体験談や親が注意していること、及び事故防止グッズ、事故が起きた時の応急処置をまとめていた。家庭内での事故では、誤飲、転落・転倒、やけど、溺水、窒息が取り上げられ、外出時の事故では、ベビーカー、カート、自転車、自動車での事故、挟む・ぶつかる事故が取り上げられていた。ここで紹介された事故防止グッズは全て既製品であった。但し、外出時のグッズはチャイルドシート関連のものが2点紹介されているだけであった。こうして、事故防止策は家庭の手作りグッズから既製のグッズの利用へと変化していったことがわかる。しかし、家庭外での事故にはグッズで対応できないことも示していた。

③2003年以降

3つ目の時期には、「赤ちゃんを襲う外での危険」(2003年5月)、「外での危険と地震赤ちゃんはこう守る!」(2004年9月)のように、家庭外の事故を扱った記事が多く見られるようになった。家庭内の事故防止については、「使える!事故防止グッズ85」(2004年10月)のように既製のグッズがたくさん市販されるようになって、紹介もされたが、家庭のアイデアや手作りグッズの紹介記事もなくなってはいない。そして、2005年、2006年には不慮の事故に関する記事数が多くなった。

まず、家庭外の事故や危険に関する記事であるが、「赤ちゃんを襲う外での危険」では次のような危険が取り上げられていた。<公園>では砂場の砂を口に入れる、砂で手がかぶれるなどの危険、遊具でのぶつかり事故、動物のフン・たばこの吸殻など落ちているものを誤飲する危険、<道路>では歩きたばこ、傘などとの接触の危険、ほこりが目に入る危険、排気ガスにさらされる危険、ベビーカーに乗っていて事故にあう危険、自転車に乗っていての事故、<スーパー・デパートなど店舗>では買い物かごやバッグがぶつかる危険、ショッピングワゴンから転落する危険、自動ドアにぶつかったりする危険、エレベーターやエスカレーターを利用する時の危険、<生き物>ではカラス・鳩に襲われる危険、犬・猫に襲われる危険、毛虫やはち、蚊などに刺される危険、その他の危険がいずれも読者の体験をもとに、危険防止の仕方とあわ

せて紹介された。「外での危険と地震赤ちゃんはこう守る！」（2004年９月）でも同様な事故体験と回避の仕方がまとめられていた。ベビーカーや自転車に子どもを乗せる時に保護者が注意すべきこともあるが、それだけでは事故を回避できない危険がたくさんある。住まいの中では事故防止グッズを使って事故が起き難い環境にすることもできるが、街では環境の改善も各人ではできない。つまり、外での危険に対しては住まいの中とは異なった対応策が求められるということである。様々な事故体験を掲載することはそれを考える土台として重要であった。

これ以降も、里帰りなど出かけることが多く、熱中症をはじめ外での事故も多い夏には必ず家庭外での事故のテーマが取り上げられてきたが、ベビーカーで出かける際の歩きたばこの危険とそれを条例で規制した自治体が紹介されるなど、追求の広がりも見られた。

事故防止策の面では、「室内の事故とけが必ず防ぐぞ！大作戦」、「使える！事故防止グッズ85」（ともに2004年10月）のように様々な視点で語られていた。前者の記事では、発達別に起こりやすい事故やその場所をチェックすることからはじめ、場所別・発達別の安全対策を読者が行っているアイデアも交えながら解説されていた。そして後者の記事では、市販されている事故防止グッズが拾い集められて紹介されていた。ここでは感電を防ぐグッズ、ぶつける事故を防ぐグッズ、転倒を防ぐグッズ、誤飲を防ぐグッズ、やけどを防ぐグッズ、転落を防ぐグッズ、その他のベビーモニター、ガラス用フィルム、挟む事故を防ぐグッズ、キッチンでの事故を防ぐグッズが紹介された。このように、既製の事故防止グッズが増加した状況を反映して、それを紹介する記事が見られるが、基本に置かれているのは事故がどのように起こるかを理解し、それの対策を考えるということである。したがって、読者の事故・ヒヤリ体験や防止のアイデアが記事の重要な構成要素なのである。

４．記事にみる不慮の事故と防止策

創刊からの14年間にどのような事故や防止策などが取り上げられてきたか、また、それで事故を防止できるかという吟味をしてみよう。

(1)家庭内事故と防止策

家庭内事故として取り上げられたのは、「やけど」、「誤飲」、「窒息」、「溺水」、「転倒・転落」、「ぶつける・挟む」、その他（切る、感電するなど）である。事故や「ヒヤリ」体験については、読者の投稿で具体的な状況がたくさん記されていた。その中で、多い事故の状況と防止策をまとめれば、次のようになる。

①やけど

１つは、飲み物、味噌汁、カップラーメン、うどん、シチュー、ドリア、グラタンなど熱い飲食物でのやけどである。子どもがひっくり返す場合と保護者が子どもを抱えて飲食する場合の事故とが見られる。２つ目は、炊飯器、電気ポット、やかん、鍋、フライパン、魚焼きグリル、ホットプレートなど調理器具でのやけどである。炊飯器の蒸気に手を触れた事故が多く見られた。３つ目はファンヒーターや加湿器の噴出し口、ストーブやその上に置かれたやかんを倒してのやけど、電気あんか、電気毛布、電気カーペットでの低温やけどなど暖房器具でのやけどである。その他にも、浴室の熱湯、蚊取り線香、アイロン、ドライヤーでのやけどなどが紹介された。

防止策としては、グッズの利用などによる環境づくりと、行為での注意がある。熱い飲食物に関わっては、テーブルクロス、ランチョンマットは引っ張られる恐れがあるので使用しない、底の安定した食器を使うことが前者に該当し、子どもを抱いたまま熱いものを飲食しないなど

が後者に該当する。調理器具や暖房器具でも、キッチンに入らないようガードをする、ストーブなどにガードや柵をつける、コンロのスイッチを触れないようにグッズを利用して覆うなどが前者に該当し、炊飯器やポットは高いところに置く、ストーブの上にはやかんを置かない、電気カーペットで長時間寝かせないなどが後者に該当する。

②誤飲

最も多いのがたばこや吸殻であるが、薬、硬貨、ボタン、おはじき、ホッチキスの針、アクセサリー、乾燥剤など身近にある小さいものの誤飲例が極めて多く見られた。また、観葉植物の土や肥料、防虫剤、洗剤、画鋲、時計やリモコンの電池、おもちゃなど様々なものの誤飲があり、灯油タンクのポンプを放置していて飲んでしまうこともあった。

誤飲の防止策では行為・生活習慣での注意が重要になる。ごみ箱を床に置かないようにする、3.5cm以下のものは子どもの手の届かないところに保管する、床掃除の回数を多くし、室内を整理・整頓する、たばこや灰皿を手の届かないところで管理するなどである。それとあわせて、誤飲した場合の対応も「誤飲チェックリスト」に作成され、毎年1回程度紹介されてきた。1995年11月の「事故防止＆救急シート」では、石油製品、強酸・強アルカリ製品の危険物を飲んだ時は吐かせないで病院に行く、それ以外のたばこやしょうのうなど危険なものを大量に飲んだ時は吐かせてから病院に行く、危険性が少ないものを少量飲んだ時は吐かせて様子を見るという対処が紹介されていた。これ以降も同様な区分が示された。

③窒息

新生児は寝返りができないことなどから、ベッドのまわりの布団、タオル、ぬいぐるみ、おもちゃ、枕、ガーゼなど、柔らかい布製品で窒息が起こりやすい。衣服のひもや電気コードが首に巻きついて窒息することもある。また、するめ、果物、氷、ウエハースなどの飲食物でも事故が起こっているが、プチトマト、こんにゃくゼリー[9)]では死亡事故も起こっていると報じられた。

事故防止策としては、大人用の布団など柔らかい寝具を使わない、ベッドのまわりに柔らかい布製品を置かない、うつぶせ寝をさせないようにする、のどに張り付きやすいりんごやきゅうりの薄切りを食べさせない、弾力のあるプチトマトやこんにゃくゼリーは小さく切って食べさせることなどが記されていた。

④溺水

浴槽や洗濯機に残った水での溺水、バケツ・洗面器の水の汲み置きによる事故など、家庭内での水の事故が多い。浴室では保護者が洗髪をしている間に浴槽を覗き込んで落ちてしまい、溺れる事故が見られた。また、トイレに顔から突っ込み、身体を起こせないこともある。これらは、赤ちゃんの頭の比重が大きいために怒りやすい事故である。

事故防止策ではいくつかのグッズが紹介された。浴室に入れないようにする、洗い場や浴槽に滑り止めを施す、バスチェアなどを使用する、洗濯機のドアが開かないように固定するなどの事故防止グッズである。それとあわせて、行為での注意も記されていた。入浴中に子どもから目を離さない、浴槽や洗濯機の水は使用後すぐに抜く、バケツ・洗面器に水の汲み置きをしないなどである。事故防止グッズを使用したからといって注意を怠ると事故を招くことになる。

⑤転倒・転落

転落事故では、寝返りをしてベッドから転落、歩行器、いす、ベビーチェア、プレイジムからの転落、玄関、階段での転落、クーファンからの転落が多く報じられた。また、転倒事故では、キャスター付きワゴン、網戸、カーテンなどでつかまり立ちしての転倒、電気コードやカー

ペットの端につまずいての転倒、手押し車で遊んでいての転倒などが見られた。

防止策については,室内環境の面では、玄関や階段には転落防止の柵などを置く、玄関はマットなどで保護する、階段には滑り止めをつける、室内の段差を解消する、マット等は滑らないように固定する、電気コードは１つにまとめるといった用具・グッズを使っての対策がたくさん紹介された。それとともに、ベランダや窓に鍵をかける、そばには踏み台になるものを置かない、カーテンは短くたくし上げる、ベビーチェアはベルトでしっかり固定する、靴下を履かせる時は滑り止めを付けるなど保護者が注意していることも紹介されてきた。

⑥ぶつける・挟む

家具の角やドアにぶつかる、食器で頭を打つ、テーブルの上に置いてあるもの（ＣＤプレーヤーなど）を引っ張って頭にぶつけるなどのぶつかり事故、ドアのちょうつがいに手を挟む、引き出しやキャビネット、灰皿の穴に指を挟む、扇風機の隙間に指を挟むなどの挟む事故が多く見られた。

この防止策でも様々なアイデアや既製のグッズが紹介されてきた。家具などの角はクッション材で保護する、ドアで指を挟まないようにストッパーで隙間をつくる、キッチンやたんすの引き出し、冷蔵庫、テレビのキャビネットなどをＳ字フックや紐、その他のグッズを使って子どもが開けられないようにする、扇風機は壁掛けタイプのものを使用する、扇風機にネットをかけて指が入らないようにするといったものである。

⑦その他の事故

カッターナイフ、はさみ、包丁、剃刀などで切る、おもちゃの鈴で口を切る、口にした棒やスプーンでのどを突く、電機コードをかじる、コンセントに金属を入れて感電するなどの事故とグッズなどによる対策が紹介された。

以上のように、用具を使った事故防止が有効な場合があり、たくさんの既製のグッズも紹介されてきた。その最初に当たる1994年12月の「住まいの点検＆整備セーフティベビー」では、「注意／セーフティグッズは不慮の事故の予防、被害の軽減に役立ちますが、万全ではありません。使用に際しては、取扱説明書を十分読んでください。」と記載していた。既製のグッズが多く紹介されるようになった1998年３月の「事故防止アイデア大集合」では次のような注意書が見られた。「この特集で紹介しているグッズは赤ちゃんの事故を未然に防ぐためのものですが、事故がまったく起こらないわけではありません。グッズの使用とともに大人が気をつけるようにしましょう。」

つまり、この頃までは既製のグッズの安全性や効果が不確かであったと思われる。その後は認知されるようになったためか、こうした記載が見られなくなった。

(2)家庭外事故と防止策

家庭外事故として取り上げられてきたものは、「熱中症など暑さによって起こる事故」、「乗り物の事故」、「公園・道路・店などでの事故」、その他である。

①暑さによって起こる事故

衣服の着せすぎや水分補給の不足による脱水症状、日射防止のない屋外で遊んだり、暑い中をベビーカーで長時間移動することによる熱中症が多い事故であるが、室内でも水分補給や体温調節がされないと熱中症を引き起こす。また、太陽光で熱せられたチャイルドシートの金属ベルトや車のボンネットに触ってやけどしたり、裸足でベランダやアスファルトの道に出て足にやけどをする事故､さらには強い紫外線を浴びて重度の日焼けをする事故が紹介されてきた。

事故防止ではまずは日射対策が呼びかけられた。つばのある帽子をかぶる、通気性のよい衣

服を着せる、ベビーカーの日よけをおろすことなど。熱中症を防ぐためには11時から15時は外出を控える、適度な水分補給を行うことも注意されてきた。また、やけどをしないように、車を炎天下に置く場合はチャイルドシートの金属部分をタオルなどで覆う、日焼けには日焼け止めを利用することなどの防止策が見られた。

②乗り物の事故

ベビーカーでは、ベルトを締めていないために子どもが立ち上がって転落した、取り付けたＳ字フックに荷物をかけすぎて転倒した、側溝のグレーチングにタイヤが挟まって転倒したといった事故が見られた。車ではチャイルドシートを装着せずに起こる事故やベルトを締めていないなど不備な装着で起こる事故が多かった。車のドアや窓に身体を挟む、屋根に頭をぶつける事故も見られた。自転車では子どもを乗せたまま離れて転倒したという事故が多いが、後ろ座席の子どもが曲がり角で振られた拍子に周りのものに頭をぶつけたといった事故も見られた。

ベビーカーの事故対策としては、ベルトを締める、もち手に重い荷物をぶら下げない、エスカレーターではたたむことなどが示されていた。車ではチャイルドシートを正しく着用する、わずかな時間でも車内に子どもを置き去りにしない、窓を開けられないようロックしておくといったことが対策であった。自転車については必ずロックをし、すぐに子どもを降ろす、サドルは足がしっかりつくように低く下げる、ヘルメットを着用することなどが注意されてきた。

③公園、道路、店などでの事故

公園ではブランコ、滑り台などの遊具からの転落、ブランコの揺り戻しが頭にぶつかる事故が見られた。道路ではベビーカーに乗っていて、歩きたばこの火と接触しそうになった、歩いている人の傘やバッグとぶつかったという体験が多かった。スーパーなど店舗ではベビーカーに乗っている子どもに買い物かごがぶつかった、ショッピングワゴンから転落した、あるいは転倒した事故が多かった。自動ドアが開かないでぶつかる事故も報告されていた。

事故対策では、公園については、砂場や遊具の安全を保護者が確認して遊ばせる、道路では子どもの目線で危険をチェックし、危ない場所は避ける、店舗については、ベビーカーに乗せての買い物は避けて子どもを抱くか店のカートを利用する、自動ドアはセンサーが感知できないこともあるので、開いてから出入りすることがあげられていた。

④その他

川やプールで溺れる、雨の日に滑る、プールサイドで滑るなど水の事故があった。また、犬にかまれた、カラスなどに襲われた、毛虫にかぶれたという生き物による事故も紹介された。

このように、家庭外では様々な危険があり、その予測ができないことも多い。保護者が「先手を打って危険を取り除いたり、危ないことを避けるように誘導する必要があります」[10]という危険回避は乳児期には有効であるとしても、いつまでも続けていれば子どもの危険回避が育たないなどの問題も生じるだろう。家庭外の事故防止には課題が少なくない。

５．まとめと考察

『ひよこクラブ』における不慮の事故とその防止・回避、起こったときの対応に関する記事は夏と冬の特集を中心に組まれ、年を追うにつれて充実してきたと言える。基本的な変化として、１つには家庭内の事故を防止するための既製のグッズが多く市販されるようになり、これらを使った防止策が紹介されるようになった。それまで各家庭の工夫やアイデア用具として紹介されていたものが商品化されたとも見ることができる。ともあれ、手軽に事故防止を行うことが出来るようになったという一面はある。しかし、既製のグッズで対応できる事故は限られ

ており、また、用具等によって事故が起こりにくい環境をつくっても、行為で注意しなければならない面が多々ある。あるいは、既製のグッズの安全性や効果はまだまだ確かめられねばならない。こうしたことが課題と言える。

もう１つの記事の変化は、様々な家庭外の事故への注目である。これは2003年以降に見られる変化である。家庭外ではまさに様々な、予測し難い事故が起こること、その防止策も家庭内の事故のようにグッズを使ったりして自力で防止できないことが特性として上げられる。しかし、保護者が子どもの先回りをして危険を取り除いたり、危険を回避することだけが強調されれば、親子の行動を狭めたり子どもの成長にも影を落とすことになりかねない。この点で、記事でもまちづくりに注目したり、視点を広げるなど興味深い変化が見られる。それでも家庭外の様々な事故の取り上げは最近始まったばかりで、今後の重要な課題である。

注

1）拙文、乳幼児の家庭内外における事故、山口大学教育学部研究論叢第53巻、2003年
2）社団法人日本雑誌協会（JMPA）のマガジンデータによれば、主な育児雑誌の創刊年と2007年の平均発行部数（印刷証明付）は次のようになっている。＜マタニティ・育児＞『ひよこクラブ』（ベネッセコーポレーション）、1993年、239,956部、『たまごクラブ』（ベネッセコーポレーション）、1993年、163,348部、『おはよう赤ちゃん』（学習研究社）、2004年～2008年（３月で休刊）、68,166部、『Baby-mo（ベビモ）』（主婦の友社）、2002年、88,091部、『Pre-mo（プレモ）』（主婦の友社）、2002年、55,066部、＜子育て＞『SESAME（セサミ）』（角川SSコミュニケーションズ）、2003年～2008年（３月で休刊）、120,000部（印刷証明なし）、『げんき』（講談社）、1994年、115,000部、『こっこクラブ』（ベネッセコーポレーション）、1996年、107,479部、『edu（エデュー）』（小学館）、2006年、78,181部
3）「2006年人口動態統計」では、０歳児の不慮の事故による死亡数149人のうち、家庭内での事故によるものが116人、１～４歳児の不慮の事故による死亡数207人のうち、家庭内での事故によるものが99人である。
4）「お部屋づくり」（2002年７月）
5）「お部屋づくり」（2000年１月）など。
6）例えば、「事故を防ぐお部屋づくり＆収納計画」（2001年12月）
7）「ママのヒヤーリ体験」（1995年12月）
8）「わが家の事故対策」（1994年11月）
9）国民生活センターでは、1995年以降の蒟蒻ゼリーによる死者は17人と発表されている。
10）「赤ちゃんを襲う外での危険」2003年５月、p.187